094　氷ノ山　031121

◎“ようか但馬蔵”という道の駅、夜の12時を少し回った、「さあ　寝よう」　晩飯と風呂をすませて、夜8時車に乗った。初めての道、しかも夜、「道が　あってるか　な・・」とドキドキしながらも予定の道の駅に着いた。軽く一杯飲んでバタンキュウである。朝は7時ころ目覚めた、ぐっすり眠れた、大型トラックのエンジン音も気にならなかった。家で用意したおにぎりやらサンドイッチやらをほうばり、出発した。道の駅に地図看板があり、“福定親水公園”や“氷ノ山国際スキー場”が載っている。なんとか行けるだろう。

◎8：20出発。駐車場にはすでに10台以上の車が止まっていた。林さんが計画してくれたコースで登る、林道をスキー場まで行き、時計回りに登る。氷ノ山は三度目だ。

◎国際スキー場とはいえ、なんだか狭い感じのスキー場。上で、ものしりの人の話では、「そらあ　鉢伏山の方がスキー場はすごい　負けんように　国際としたのでは・・」とのことでした。

◎黒い雲が30%ぐらいの青空、晴れてはいるが、快晴ではない。お陽さんの力も強くないが、歩きだすと汗ばみ防寒具を脱いだ。シャツ2枚でちょうどいい。

◎林道を、スキー場の横を1時間足らずで登山口、杉の植林の中を、薄暗い森を登っていく。「エンヤコラ」尾根に出る、避難小屋がある、「思い出した　50歳ころ　村上君の　和田山工場で　用をすませ　ちょいちょいと登って　日本海で車中泊をした　あのころは　元氣だった　ちょいちょい　だった」

◎目の前にでかいブナがある、葉が茶色になっている、茶色はいやだね、レモン色がいい。「おまえの　都合にそうそう　あわせてられん」ブナに怒られそう。青空にシャツ2枚、陽の当たる斜面は紅葉がまだだ。

◎神大ヒュッテを通過。左へ下ると大段ヶ平登山口、その途中に“大屋町避難小屋”がある。「思い出した　60歳の頃　衣川さんと　避難小屋に　泊って　一杯飲んだ　その時も　ちょいちょいと登った」

◎千本杉と標識。直径1メートルぐらいのスギがあちらこちらに、これは気持ちがいい。クリの枕木や丸太を敷き詰めた登山道、かつてきれいに整備した跡が残っている、昭和の香りの登山道だ。

◎避難小屋のあるてっぺんにやってきた。10人ぐらいの人がいた。昨日の残り物を詰めた弁当を開いた。ものしりの方、「ここは　鳥取県と兵庫県の県境　向こうに見える　扇ノ山は　日本海側は　雪が深い」「ここも　今年になって　二回ぐらい　雪が降ってる」まさか、鳥取県まで来ていたとは、雪が降ったとは、驚きだ。

◎大きな雄シェパードが2匹いた。でかい顔、あれでガブットいかれると怖い。うちの奴は雌の小ぶりな外犬だった。可哀そうなことをした。犬は室内で飼い、寝起きを共にすると途端に気持ちが通じる。外犬は気の毒だ。

◎飯を喰って出発。こちらは北側斜面、地面が湿っている、水気がある、泥もある、樹々も黄色が目立つ、様子が違うね。仙谷分岐を氷ノ山超へ、左に曲がると仙谷登山口らしい。なかなか複雑な登山道なり。

◎“ブナ原生林”と書かれた標識。「おおお　すごい　きれいねえ」力強い、でっかいブナがあちこちに、とはいえドラム缶ぐらいの胴体、まだまだ若々しい。この山は、ドウタンツツジ、スギ、ブナと賑やかだ。

◎“氷ノ山超”という四つ辻があり、避難小屋もある。まっすぐ行けば鉢伏山の方に、左へ行けば鳥取県側の仙谷登山口らしい。地蔵さんがあり、伊勢道となっている。かつての“お伊勢参り”の街道らしい。

◎ネット検索：鳥取県側の若桜町（わかさ）から、この地蔵のある峠を通って、大江にある元伊勢への参道道らしい。“元伊勢”とは京都府の大江、昔、今の三重県の伊勢神宮が京都福知山の大江にあったとか・・。

◎だいぶ下の方に下ってきた、流れが近い、登山道が通行止めではしごが横にかかっている。「こわいな」と思いながらそろり、横の鉄パイプが下にずれていった、「大丈夫かいな」そろり降りた。できたての道、強く踏むと土がヅルリ、そろり歩いていくと5.6人のヘルメット作業員と監督のあんちゃん、道が崩落している。

◎地蔵堂がある、トタン囲いの小屋、人物大の石の地蔵、伊勢道のなごりかな。床に祠の解体木材がある。かつては、立派なお堂があったようだ。修繕していた道も江戸時代からの道だねえ。修繕感謝だ

◎「あれれ　広場　キャンプ場」道を間違えたかと思ったが、駐車場のちょっと上だった。

◎3：15下山。山さん、ありがとうございました。湯を沸かし野菜入りラーメンを、コーヒーを飲んだ。帰り着いたのは夜の8時頃、24時間の登山付き小旅行なり、満足満足。

095　安威川　081121

◎安威川河川敷に来ている、久しぶりに IC レコーダーを持ってきた。「本日は晴天なり」と言いたいところだが、空は青空が 10%、あとは白い雲、その底はやや薄暗い、「これでも　やはり　晴れだ」という天気だ。もうじゅうぶんに秋の真っ最中、長袖シャツとジャンパー、自転車の時は薄いダウンまで着ている。

◎一昨日から風呂の電灯が点かない、電球が切れたがもう風呂に湯が張った状態なので、翌日、昼間に電球を買い、取り付け作業をしていたが、なかなかうまくいかない。風呂桶の細い縁を左右に回転するうちに、そうこうするうちに、気持ちが悪くなってきて、冷や汗が出て、道具をかたづけ 1 時間ほど寝た。

◎翌日、近所の電気屋で、切れた電球と似たような電球を見つけ、なんとか取り付けた、なんとか点灯した、次は下からふたをするという段階で、「ペキ」「あちゃ　電球が　われた」なんともはや情けない。もう一度自転車で、今度は遠くの本格的電気屋へ、元々のものと同じタイプの電球を見つけ取り付けた。まずは灯った。次にふたもうまい具合に入った。電球の取り換えでこんなに大変だとは、変わったデザイン物の器具は、こういう時に大変だ。

◎話はとんだが、めまいの話。NHK の TV 番組に、火野正平が自転車で全国を回る番組がある。「あいつは　嫌いだ」という人もいるが、オレは好きだ。火野正平はさておき、後ろの自転車のカメラが、前で自転車をこぐ火野正平を長らく写す。オレはそのシーンを見ると目をそらす、目が回ってくる、酔ってくる。この話をひとにすると、「そんなばかな　そんなことで　目がまわるの　そんなことないよ」と皆さんからバカにされる。火野正平の自転車がフラリフラリ、右へ左へスイスイ進む時も、坂道で、は～は～ぜ～ぜ～の時も、見ていると目が回り、気持ちが悪くなるので、目をそらすようにしている。

◎1 時間ほど寝て、「まだ 3 時だ　河原に行こう」と自転車に乗った。「大丈夫かな　途中で　倒れたら　アカンぞ」と思ったが、なんなく河原までやってきた。

◎冬至までまだ一か月半ぐらいあるが、陽の落ちるのが早くなってきている、夕方の 5 時くらいには薄暗くなる。時間は 4 時頃、夏ならまだ日差しがきつく、「4 時半まで待とう」なんて言いながらやって来ていたが、この季節はもう帰るころには暗くなってきている。

◎安威川は、底浚え工事で草木が無くなり見晴らしがよくなった、少しだけのススキが白い穂を揺らしている。この何日か、雨が降っていないので水の量は少ない、川幅の三分の一か四分の一ぐらいの静かな流れがある。そういえば何年か前には、もう少し上流だったけれど、川がまったく干上がって白く干からびている部分があった。不思議なことにその上流とその下流は、ちょろちょろと流れていた。地下の部分でちゃんと“ちょろちょろ”がつながっていたんだ。

◎コロナめ、報道では相当数が減ってきている、相当減ってきているが、外国ではまたまた次の波が来ているらしい。ヨーロッパもアメリカもそんな傾向らしい。日本もこのまま鎮静化すればいいのだけれど、またまたぶり返すと嫌だね。今朝、ラジオで、「コロナと子供の自殺」ということを話し始めていた。コロナ禍が始まって 2 年ぐらいか、オレのようなジジイでも、人と会わない、電車に乗らない、飲み会もなくなった、とぼやいている。子どもたちは、居場所がなくなった、SOS を出せる最後の砦の友人たちと会えない。報道で、〇〇さんがコロナで亡くなった、〇〇さんが自殺した、などと声高に追いかける。子どもにしろ、大人にしろ、自殺した話は、ぐさりと刺さる。

096　安威川　101121

◎安威川での、IC レコーダーが続く。あれれ、今日はカラスしかいないのか、舞っている奴、二羽で飛び回り追いかけあって遊んでいる奴、じっとたたずんで前を見つめている奴、鳴いている奴、喧しくはやし立てている奴・・様々だ。カラスくんたちは雑食性、草もついばむ、肉もついばむ、ごみも残飯もついばむ、生きることに旺盛だ。川の浅瀬て水浴びをする、「カラスの行水」は嘘だね、気持ちよく水浴びしてるよ。このあたりのカラスは“ハシブトガラス”と“ハシボソガラス”が居るというが、いまだにどっちなのかわからない。ま、ずっとわからなくてもいいかな、そんなことはどうでもいいや。

◎草が茂った水たまりから、おやッと、白いサギがオレに驚いて舞い上がった。サギ類は 10 メートル以内は近づいてこない、警戒心の強い鳥だ。ただ、餌をくれる人はよく知っているのか、いろんな鳥がパンくずなどを撒いてる人のそばでバタバタやっている。先日はおっさんの手に乗ってるハトを見たよ。しばらく走っていると、続いてカモ類が流れの中を進んでいる。カモ類は水に浮かんで足かきですすむ、彼らの水に浮いている身体はどっしりしているが、水の中、足を右に左に指の間の水かきがスクリュウ状態で忙しく動かしてるはず。カモ類はずっと年中ここにいる奴と、遠くシベリヤからこんなところにやってきた方々が混じっている。どなたが留鳥で、だれが渡り鳥か、オレにはわからない。オオバンもいる、この鳥も、留鳥と渡りがあるらしい。ここにいる彼らは、シベリヤからの渡り鳥だと、カンちゃんに教えられた。

◎日没の 1 時間ぐらい前、まだまだ明るい、夕方だが、陽は西に沈みつつあるが、陽の光は白く強い、白い光が雲の間からチラリちらり、残念ながら天使の階段は今日は見られない。白い雲、黒い雲、白い光が強くピカリ、昔のヨーロッパの風景画の光のさまだ。昔カメラマンの中西さんが、「日暮れの 10 分が　いい光」というが、なんのことかなと訝っていた。陽が落ちる少し前に、陽の光がオレンジ色に見える、その光らしい。オレは光のことは、ほとんど気にしなかったが、カメラマンは光が命らしい。

◎先日、M 君が、「新築したが　絵が欲しい　2 時ぐらいに行く」いやあ　ほんまかいな、うれしい話、久しぶりの話である。いつもは本名をだすことが多い当ブログだけれど、これは名前を伏せた方がいいと判断。来ないねえと待っていると、女の人の声がした。「この人に任せると　どんな絵を選ぶやら　私が見たい　選びたい」と奥様同伴で来てくれた。自宅なので 6 号 10 号、一辺が 50 センチ足らずのものをいくつか用意していた。「あれがいい」「え　あれはまだ描きかけです　大きいですよ」「いいです　あの大きさがいい」奥さんが選ばれたのはなんと 50 号（H120xW90CM）普通の家の食事の机の大きさだ。「それじゃ　できあがって　いるものを」オレは慌ててアトリエの隅に、キャンバスだけを巻いてある 10 枚ぐらいの絵をアトリエの床に広げた。「これもいい　いやあれも・・」「やはり　これ」決断の早い方だ、素晴らしい。オレとしては、大きな絵を飾ってもらって、嬉しい限り、日本の住宅もこうならなくっちゃ、万歳である。

◎そういえば最近絵の話が少ないね。「岡村　描いてるか　やめたらあかんぞ　終わりやぞ」電話口で怒鳴っていた友人を思い出す。オレはいつも絵ができあがるとサインと日付入れる。サインは TAKA と書く。日付は二十歳代に展覧会を観にいった画家、ホルストヤンセン Horst Janssen ドイツ人の真似をして、日・月・年を書いている。以前は同じ日付のものがいくつかあったが、ここ何年かは重ならないようにうまく調整している、同じ数字の絵はないはずである。とはいえこれも少々怪しい、がはは。壁のカレンダーにはサインを入れた日に印をつけている、毎月 20 枚ぐらいの印がある。20 枚とはいえ小さい絵がほとんどで、大きい絵は年に 20 枚 30 枚ぐらいできあがるかな。「よし　できた　これはすごい　自信が持てる」と鼻高々に雄たけびを上げる絵は年に 1 枚 2 枚もあるのかな。この歳になって、絵が描ける、出来上がっていく、色を塗らないと、あそこが気になる、あの色がよくない、なんてぶつぶつ、絵は午前中は描いている。

097　縄文　141121

土偶・コスモス＜Miho Museeum＞

◎図書館の書架から偶然に選んだ写真集が、縄文時代の土偶が、ミホ美術館の解説図書、「おおお　これは　オレが　観に行った　展覧会の　図録」借りて帰ってパラパラ覗きながら気づいた。

◎この展覧会は、2012 年 9 月～12 月のものだ。9 年前に下の娘と観に行った。以前にも来たことあり、その時、「あれえ　ここは　宗教施設　だな」と思った。信楽焼きの近所、車でないといけないような辺鄙な場所、そんな山里だが、車を止めて歩き出すと、きれいに手入れされた日本庭園、グッドデザインの建造物、道にはゴミひとつ落ちていないというほどに、隅々まで手入れが行き届いている。京都の大寺院どころではない気配りに異様な感じがした。

◎これの前も何かの展覧会で来たと思うが、展覧会や美術に関しての“宗教臭さ”はない。

◎若い頃から縄文式土器、火焔土器、なんて言葉は知っていた。岡本太郎が目をひん剥いて叫んでいたのを思い出す。これらの土器の写真を見て、「素晴らしいもんが　あの縄文時代に　土器だけじゃなく　あったんだ」と思っていたが、その当時はそれだけだった。ミホ美術館の土偶の展覧会はものすごい数の土偶が飾ってあった。「これはすごいね　いいものだ」と感動していた。

◎小林達雄：ムラをとりまくハラは、縄文人の生命を保証する食糧庫であるとともに、ムラの生活を支える資材庫であった。縄文人の世界は、ムラにおける縄文人同士のみで完結するのではなく、ハラにおける動物、岩石、湧泉や川、そしてそれらが交じり合って構成する雰囲気や景観など一切合切を醸成している。

◎西田泰民：＜縄文文化における数の観念＞土偶、土版も含め、棒で穴が刻まれている。これは何かの数字ではないかという説だが、仮説だそうだ。

◎アボリジニのメッセージステックと呼ばれる定規のような器具がある。メモ用紙のようなものだ。

◎メッセージステックの例：メッセンジャーが話しながら、棒に刻まれた線をたどって、「私は　5K 離れた所にいる　10 日後にそちらに行く　我々は 8 人だ　4 つのものが欲しい・・」てなぐあいだ。

◎1 万年 2 万年前のホモサピエンス、外国人も日本の縄文人も、言葉は話していただろう。たくさんの単語、数は指で、たらなければ足の指で、20 以上はどうしたのか・・。

◎数学が好きだったハイティーンの頃は、10 進法とか 12 進法とかある程度理解していたが、今に至ってちんぷんかんぷん状態になっている。縄文人が 20 以上の数字を使っていたのか、N 進法があったのか、何かがあったような気がする。12 進法は古代中国から日本に伝わったのかと思っていたが、時計も暦も円周角度もある。それらを思いだすと、いろいろあって、起源は中東あたりかもしれないなと思い始めている。

◎泉拓良：ホモサピエンスと言われる我々の祖先は、アフリカから出て、4 万年前ぐらいにヨーロッパやシベリヤで食料になる大型草食動物を追いかけ、繁栄していた。サイ、マンモス、トナカイ、ウシ、ウマ・・。骨や牙を使って内部に炉を持つ頑丈な住居を建て、墓を作り、洞窟に壁画を描いた。岩石で、動物の骨や角で、人物や動物の超塑像が造られた。それらの像の写真をいくつか見ている。

◎世界の像を縄文土偶と比べて、縄文土偶の特異性がよくわかる。よそのは小さい写真、少しの資料しかないので端的には言えないけれど、我が縄文の土偶君らは抜きんでてその良さが感じられるのは身びいきかな。女性像であり、乳房、腰、臀部、陰部が強調されて造られているという。縄文土偶は、形を強調して観るより、全体の姿を見て、その奇妙な造形美、具体的な形がオレの頭の中で、おおいに吹っ飛んで、丸であり角であり、ギザギザ模様やぐるぐる巻きや、そんなこんなを縦横無尽に駆使して、しかも最後に手のひらや指でうまく押し潰し、そっと床に置いて乾くのを待っている。乾いたものを火の中に入れて焼いている。

098　御嶽山　 171121

巽好幸著＜火山大国日本＞

◎火山には、死火山・休火山・活火山がある。1960 年代までの教科書にはこう書かれていた、オレの脳の皺にも沁みこんでいる。地質学、地理学では、死火山は歴史上、噴火のないもの。休火山は噴火記録があるが現在活動していないもの。2003 年以降、「概ね過去 1 万年以内に噴火した火山および現在活発な噴気活動のある火山」を活火山としている。

◎2014 年 9 月に御嶽山が噴火した。10 万年ぐらい前に何度か噴火があり、今の御嶽山になった。1980 年ぐらいから小規模な地震やら水蒸気爆発やらがあり、2014 年に突然水蒸気爆発が起こった。

◎御嶽山には 5 回ぐらい登ったかな。毎回、田の原口から、一度濁河温泉から登っている。夏場はスキー場の上で車を止めて登った。冬は、下で車を止め、ゴンドラに乗って田の原口まで、そして登った。噴火から 10 万年の時が経っているとはいえ、この山は火山の山だ、歩いていると、黒く、赤く、焼け焦げたでっかい岩、「おどろおどろしい山」という雰囲気を漂わせていた。修験道のメッカという雰囲気も、おどろおどろしさを後押ししていた。たくさんの石像、石柱が立ち並んでいた。

◎噴火後、噴石に何度も当たりながら、なんとか一夜を過ごし生還した女性の手記がネットに載っている。降りしきる噴石で、左腕を失い、腰や背中にも傷を負った。これを聞いた時点で身震いする、身体に大小の石が当たる、ザックで頭はカバーできるが、骨が砕け身がちぎれる、まさに恐怖。彼女は意識はあるが動けず、みんなと歩いて逃げ下ることができなかった。まわりの人にザックの中のダウンジャケットとツエルトを出してもらった。彼女は地面に横たわって一夜を過ごした、9 月末の 3000 メートル地点は氷点下まで下がったと想像される、防寒具のない人たちが亡くなっていったらしい。ヘルメットの大事さも痛感。

◎9 月に登った八ヶ岳も、去年登った焼岳も、白山も、火口がすぐ横にある火山の山だった。焼岳や、北海道の雌阿寒岳では、注意書きがいくつかあった。「河口まで 1 キロ　異変を感じたら　すぐに非難・・」

◎「噴火や地震が　一年先か　百年先か　わからないの　くよくよしていられない」「ケセラセラだ　なるようにしかならん」ほとんどの方々が享楽的ではないけれど、そんなにピリピリ日々不安に過ごしていない。先生は、そんなことでいいのか・・とおっしゃる。

◎　若い頃、熊本の従兄弟の家に行った。叔父か叔母の葬式出席だったと思うが、その折、従兄弟との話で、「九州で　かつて　ものすごい噴火があった」という話を聞いた。その時は、「本当かな　聞いたことがない・・」とそのまますませていた。最近読んだ本の中に、鹿児島の方でカルデラ噴火があった、その大噴火で九州の縄文人は全滅した、灰を被った遺跡がそのまま出てきている、そんな話を読んだ。「へええ　カルデラ噴火とは　そんなに　すごいもの　なのか」と驚いた。かつて地球をわがもの顔で闊歩していた大恐竜が、大きな隕石がカリブ海に落ちた。それだけのことで、地球上の恐竜たちが全滅したという。

◎　九州には、巨大カルデラ火山がいくつかある。阿蘇、姶良、鬼界・・。2.9 万年前、鹿児島湾を作った姶良カルデラ噴火では、数百度の火砕流が 2 時間以内に九州全土を焼き尽くした。関西には 50 センチ、関東には 20 センチ、東北には 10 センチの灰が降った。10 センチ以上の降灰で、現在のインフラシステム、電気、水道、ガス、交通などがストップする。日本は全滅する。

◎3 万年前：姶良カルデラ大噴火。九州の旧石器人が全滅。南九州で 30 メートルの火砕流堆積物、京都で 4 メートル。生態系の回復、人類の活動再開には、1000 年を要したと推定される。

◎7300 年前：鬼界カルデラ大噴火。当時の縄文人に大打撃を与え、その後 1000 年ぐらい無人の地となった。その後住みついた縄文人は、以前の縄文人とルーツが違い、土器の様式が変わった。

099　縄文　221121

渡辺誠著＜よみがえる縄文の女神＞

◎「岡村　おまえは　燃費が　悪い　いつでも　何か　喰ってる」こうよく言われる。普段でも、「ああ　腹がへった」と言っているが、山を歩いている時はとにかく腹がへる、減りすぎると、ガス欠になり、スーッと血の気が引くというか脱力症状になる。とにかく徐々に何かを口に入れている。普段の生活も同じようなもので、「そらあ　若い頃に　比べりゃ　食が　細くなった」とはいえこそこそなにかを喰っている。

◎オレは、パンが好きだね。パン焼き器を買ったのが 3 年半前、なんで年数がわかるかだって、ネットで買うと注文履歴が残る、計算した、便利だね。ホームベイカリーと呼ぶそうだが、これを買うときに、「三日坊主で終わるのでは　操作が邪魔くさいのでは　後始末が大変では」なんてさんざん迷った末に注文した。あれ以来市販の食パンは買ったことがない。自分で焼いたパンは、喰ってみるとじつに美味い、やめられない、朝飯はこれを喰う、小腹が空いた時にはこれを喰う、ほとんど毎日のように焼いている。最近、高級食パンブームなのか、500 円 1000 円という値段の食パンが売っている、そんな店は、食パンだけを売っている。子ども時代は、大手のパン屋で、あんパン・ジャムパン・クリームパンなんてものしかなかったが、おっさんになったころから街中に“手造りパンや”がにょきにょきできた。どこのパン屋もなかなかにいい味出していた。オレ製のパンは、味は普通、美味みも普通、だけどあきないね、小麦粉だけの味、これがいい。

◎1 万年以上つづいた縄文時代、この 10 年 20 年でどんどんいろんなことがわかってきているようだ。若い頃は、縄文時代があったことはすでに教科書に載っていた。日本は弥生時代になってやっと定住が始まった、それまでの縄文人は石器時代人扱いだった、弥生人と縄文人は人種が違うように教わった。今の日本人は、DNA の鑑定で、縄文人の遺伝子も弥生人の遺伝子も持っているそうだ。

◎縄文人のことで気になるのが食生活のこと。今の日本人は、日々豊かな食生活を送っている。ある学者が、「昭和 30 年までは　日本人は　飢えていた　おにぎり　ひとつが　どんなに　ありがたかったか　美味かった」と涙ぐんでいた。オレも 20 歳までの頃は、「卵焼きを　たくさん　喰ってみたい」「すき焼きは　肉を　たくさん喰いたい」今の若者が聞けば、きょとんとするような願望欲望だった。

◎縄文人の食生活はどんな具合、狩猟採集生活だ、自然の中、ムラが在り、ハラが在り、なんていうけれど生きていれば毎日腹がへる、腹がへると、手を伸ばせば食料品がある、暑い夏も寒い冬も、雨続きでも、雪が積もっても、何かしらの食いものがそばにあれば、人間は生きていける。放浪生活の石器時代人は、獣や魚が獲れたら腹が満たされる。好みや果実があれば幸せになれる。いつもいつも腹を満たすものがそばにあるわけでもなし、空腹の腹をかかえて動き回っていた時間が長かったのではと思う。定住を始めた縄文人に腹を満たしてくれる食料品が日々手に入ったのかな・・。

◎縄文人の主食だったドングリ類、一口にドングリと言っても多くの種類がある。1）クヌギ類＜クヌギ、カシワ＞　2）ナラ類＜ミズナラ、コナラ＞この二つは落葉広葉樹で、東北地方。製粉または水晒し。3）カシ類＜アカガシ、アラカシ＞4）シイ類＜イチイガシ、スダジイ、マテバシイ＞この二つは照葉樹林で西南日本に多い。シイの実はアク抜き不要でそのまま食べられる。クヌギ、ナラ、トチはアクが強く、何度も加熱処理の上、水晒しが必要だった。土器の開発で製粉技術、アク抜き技術がさらに発達する。難しいと言われる栃の実のアク抜き技術も完成していた。

◎植物の生えない外国の寒冷地では、獣の肉しか食料はない。縄文時代、関東地方に 1～5 万人推定人口なら、喰うには困らないかもしれないと思うようになった。祖先の縄文人バンザイである。

100　愛宕山　　241121

◎今日は、ちょろっと久しぶりの足慣らし、愛宕山ふらふらである。空はまっさおの中に白い雲がほわほわ、昨日は一日降っていたが今日は晴れ、天気がよさそう。予報では、「冷える」と言っていたがいささか風が冷たい、とはいえシャツ2枚に山ジャケットで暖かい、というよりだんだん汗ばんできた。針葉樹、薄暗いヒノキの樹林帯を歩いている。

◎有名観光地“京都嵐山”秋の祭日、以前はバスが進めないぐらいの人ひと人だったが、コロナめのお陰で半分以下の人出かな。そうたかをくくっていた。夕方、「歩いて　嵐山観光をして　電車に乗ろう」と歩き出したが、渡月橋に近づくにつれ歩道にひとが満載で進まないぐらいの人ひと人だった。これで外国人旅行客が加われば、もっとすごい。

◎阪急嵐山駅から清滝まで歩くと1時間近くかかる。昔はバスなんて乗ろうとも思わなかったが、この5年10年、「バスに乗ると　楽ちんだ」と思うようになった。今日も待ち時間たった5分でバスがやってきた。このバスは“大覚寺”を経由するので30分かかる。「230円　あれれ　小銭が　220円しかない」バスに乗り慣れないので焦った、困った、バスが終点に着くまでそわそわ、230円の支払い方を考えた。これが言葉の通じない外国なら、もう焦りまくりだった。何度か外国でバスに乗ったが、風景を楽しむどころか、「乗り間違えてないか　乗車賃はどうして払えば」なんてことが頭を回転していた、バスには弱いオレだ、と笑い話。

◎愛宕山も人が多い、若者や子供の叫び声が山に響く。またまた道を間違えた。こっちだろうと歩いていた道が、「あれれ　前にも間違った道　表参道にぶつかる道かも」朝、家を出てすぐにGPSを忘れた、スマホを忘れたと気づいた。「昨夜　せっかく　地図を　ダウンロードしたのに」「まあ　かつて　知ったる　山だ」ところがどっこい、最近のオレはこういう楽観は通用しない、道を間違え、思い込み、歩く感覚がぼけている。

◎表参道は長らく歩いてない、友人の山田さんが“道直し”のボランティアをやっている。「土木作業だ」と聞いているが歩く者にとってはありがたいことだ。コースタイムで2時間半の道、台風で大崩れした道、倒木、土砂崩れ。穴を掘り、木を切り、石を並べ、木を並べ、ロープや針金を結び、大変な仕事だ。オレにはできない、農業ができない、土木作業ができない、おおいにゴメンね、世のなかに。

◎今日は、体力を試したかった、どんどん弱くなってきている歩く力、2本目3本目でばててくる、今日はどうなのかなと。てっぺんまで2時間半、1回の小休止で登り切れるか、なんてことで歩いていた。道を間違え予定の道ではなかったが、予定より少し早くてっぺんに到着した。50代60代の山慣れした連中には追い越されたが、まだ体力は残っていた。愛宕山なんて、と思っていたが、ここもしんどい山になってきている。

◎愛宕神社の裏側、「ここは神域です」と書かれた山の中、なんと直径2メートルぐらいの切り株がある。現代ではでかい樹だと見上げても、せいぜい直径1メートルぐらいの山の風景の中で、直径2メートル3メートルなんて大木が立っていたらと想像するだけで目がくらむ。そんな目もくらむような大木のある風景が平安時代以前、日本の山々の中は普通の風景だったんだろうねえ。

◎愛宕山は神の山、寺があり神社があり地蔵があちこちに祭られている。その足元に造花の花が供えられている。造花の花は時間が経っても色褪せることなく、赤に黄に緑がモノクロの風景の中にある。これは汚い、オレはいいとは思わない、よくない。花は枯れてもいい、筒に差した花が倒れ枯れ萎れても、そのほうがいい。盆暮れに墓参りに行く折、花を持っていくが、これも夏なら一日でダメになってしまう。「造花でも・・」と思うが、これはやめておこう。

◎降りてきた、清滝の村中を歩いている。「ゆず300円」小銭をカンカンに入れザックに詰めた。川のそば、赤い紅葉が素晴らしい、陽の光を通して光って見える。いつも言うように、レモンイエローの黄葉が好きだ。イチョウにブナかな、そうは言うけど赤もいい、「どっちだ　はっきり　せえ」がははである。

◎トンネルを歩いて嵐山の方に向かった。“愛宕念仏寺”の地蔵さんが向こう側に見える、けっさくな顔をした石の地蔵がいい。入って見ようと思ったが疲れているのと、300円が要るのでやめた。次が“あだしの念仏寺”これもわざわざもう一度見たいところだが、通り過ぎた。

101　縄文　291121

渡辺誠著＜よみがえる縄文の女神＞

◎日本人が米中心の食生活をするようになったのは、およそ2000年前ころからで、それ以前の私たちの祖先は、少量の動物の肉や魚介類に加え、いろいろな種類のドングリや栃の実から作ったパンやクッキーなど、とても栄養とバラエティーに富んだし食事をしており、それが一万年以上も続いたのである。

◎縄文人がドングリ類を食べるようになったことで、それまでの移動生活から定住生活へ移行していったとみてとれる。ドングリ類や栃の実のアク抜きをするためには、水を多量に使わなくてはならず、また何度もボイリングする必要があるため調理場が必要で、そうした条件を満たすには移動生活では無理があるからだ。

◎堅果類などを食べていた証拠としてなるものは、採集具としての籠類、乾燥のためのムシロ、皮むき・製粉用の道具、灰の確保、水晒しの場所と道具、煮沸用具、食器などが遺跡から出土している。

◎森の近くに竪穴住居を建て、堅果類の調理貯蔵、長期保存のための、特に積雪の多い雪国には大型家屋がある。幅4メートル、長さ45メートルにも達する建物跡が山形県にある。

◎縄文時代の遺跡から、年々驚くような発見があるようだ。土器や石器や骨製品は1万年以上、土の中で残っているが、木製品、植物製品は腐って消えていることが多い。土器を作る時に裏側に圧痕が残っている。その圧痕を分析することで、組物、編み物、植物の形、実や種がわかってきている。

◎組む、編む、こういう技術を持っていたなら、細かい作業が好きで根気のある人なら、布や籠や網などを作ることができた。材料は植物を砕いたり細く裂いたりして作った。ワラを撚って縄を作る、細い植物繊維を撚って糸を作る、この作業で布や籠や網などが作れる。考えてみれば現代にも通用する技術、今でも縄文時代の知恵、技術を使っているのかもしれない。縄文人は、土人のような生活かもしれないが、争いはなかったようだ。

◎縄文の漁業形態は、外洋性漁業、内湾性漁業、河川漁業、の三つに大別される。

◎外洋性漁業。1)北海道寒流域ではトド、アザラシ、オットセイといった巨大海獣を獲っていた。海獣を獲る狩猟具が、縄文遺跡から出土している“はなれ銛”である。銛は30メートルほどの丈夫な紐でつながっている。水に強いイラクサの繊維を潰して撚って紐を作っている。2)岩手県のリアス式海岸。暖流のおかげでマグロ漁が発達していた。タイ、カツオ、イルカ、サメなども獲られた。シカの骨で作られた釣り針が多く出土している。3)西九州。結合釣り針、黒曜石を木の軸に植え付けた銛を石鋸と呼んでいた。韓国の遺跡からも同様のものが出土している。当時は、韓国と九州地方で交流があったと思われる。

◎内湾性漁業。霞ケ浦周辺、内湾周辺の人々は住居近くの浅瀬の海岸で貝の採集、網を引いたり、やすで突いて魚を獲っていた。網を編むための網針や、網に付ける石製や土器製の錘が出土している。

◎繊細な釣り針は作れなかった、鹿の角などで大きな釣り針を作り、外洋性のマグロなどを釣っていた。

◎製塩。海中にあるアマモを集める。それに何度も海水をかけ、塩分を付着させる。それを火にくべて焼き、灰を集めて海水に溶かす。製塩土器に入れ煮詰めることを繰り返し、結晶化した塩を取り出す。この方法は日本独自の、縄文人の技術のようだ。

◎雪の地方では、カンジキ、雪靴も出土している。ワラよりシナノキの樹皮や、ヤマブドーで編まれている。

◎50歳60歳代、澤山さんに連れられ信州の雪山を何度も登った。若い頃、新宿駅発、冬の夜行列車に並ぶ登山客のキスリングを見ていた、「雪山に行くんだ　すごいところだろうね」同世代の若者たちがたくさんいた。当時は登山ブームだったのか、「オレも登っていた　私も行ったことがある」という話をよく聞いた。山に登り始めたのは40歳ぐらいから、オレの雪山は“ピッケル”と“アイゼン”だったが、近畿の低山でカンジキを着けた人を見た。「この山は　カンジキだよ　カンジキでないとだめだよ」どうも雪の軟かい処はカンジキ（わかん）がいい、アイゼンだと靴と同じように深い雪に埋もれてしまう。スノーシューは持っていない。